

# 回会報

新日本美術協会

## 第三十七回新日美展を振り返って 実行委員長 松本 正

第37回新日美展は委員及び会員の皆の大変な協力を得て無事終了することが出来ました心から御礼申し上げます。

今回の展覧会は絵画の部、工芸の部とも全体的に充実した展覧会となりました。特に会員の力強い作品や一般の出品の中に意欲的で良いものが多く見られたと思えました。又、最大のテーマであった「一般出品数の増加」ですが、絵画で84点と昨年の2.2倍となり今後に繋がる成果となりました。工芸を含めた全体では応募出品数306点応募者数258名、入場者数5091人、ポストカード売上数500枚等何れも増加となりました。

更に、今回の新規企画として、新聞社による招待券の発行を行いました。この招待券での入場者が214名となりました。今後の新日美展での更なる増加を期待します。

会場でのイベントとしては、外部審査員の芳賀先生によるギャラリートークを例年の通り2日間実施しました。一般の出品者が多く参加され画評に聴き入りたり、質問やらで時間をオーバーするほどの盛況となりました。

懸案項目としては会期中のスタッフ不足です、今回も会員の皆様に協力いただきましたがまだまだ不足です。今後の新日美展を更に、充実したものにする為には会員の皆様の協力が必要です。是非とも積極参加をお願いします。

次回第38回展に向け反省点を洗い出し改善していき魅力ある新日美展となる様進化していきます。

事務局  
千葉県柏市大津ヶ丘  
3-17-17-401  
森屋治三方  
TEL.04-7191-6760  
  
編集委員  
本部 小高峯夫  
富岡ネム  
大石 亨  
京都 四方公子  
広島 藤原清二  
  
次号平成26年2月予定



芳賀先生による個別講評

## 三十七回展総評

外部委嘱審査員 中野 中先生

突然だが夏目漱石の評論に「芸術は自己の表現に始まり、自己の表現に終わる」というのがある。大正元年にこのように述べている。絵画でも、工芸でも制作するという事は自分を表現することだと思ふ。だから技術も大事だがそれ以上に、自分の知性、感性、宗教観とか体験してきた人生観などが作品に織り込まれなければそうはならない。制作する動機となった初めの感動は何だったのかよく吟味する必要があるのではないかと、例えば色だったのか、構成だったのか、見たものをそのまま描いても、作品にはならないのではないかと。今回文科大臣賞の「越前の海」を描かれた方は福井県在住でこれまでも越前の海を描かれてきたと記憶していますが、多分身近に海があり何回も何回も見て頭の中に海が出来ているのではないかと思ひます。それで今回の作品は写実ではあるがそのままの風景ではなく、構成が吟味され独自の力強い内面表現の作品になっていると思ひます。  
(要約して一部を掲載しました)

## 三十七回展審査所感 副審査委員長 絵画部門 山下利隆

審査会の当日は上野の山も晴れわたり気持ち良いお天気であった。今年も熱意ある作品が北は北海道から西は鳥取、広島よりさらに太平洋を越え出品された一点を加えて、一般から84点会員から147点(会長、審査委員の16点は対象外)合わせて231点の中から、丁寧に厳正な審査姿勢を持ち、外部委嘱審査員2名を含め17名により入選、入賞作品の選定作業を行いました。受賞された方、初入選の方々誠にありがとうございます。

「私の寸時のつぶやき」、今度の絵はお店に譬えると都会の名店的なイメージを感じる絵は無いけれど、無欲で素直に創られた良品が小さなウインドウに飾られていると感じる作品が多々ありました。次回展には、あなたの万感を籠めた名品を期待します。

・秋晴れの園と一緒に審査する(絵描くぞう)  
・彩色(いろいろ)なあなたのアートから取り  
(新日美展)副審査委員山下利隆

## 副審査委員長 工芸部門 富岡ネム

審査終了後に一抹の不安が残ることがある。もとより「用」の美を追求し続けた匠の技ばかりが工芸であるならば問題はない。のだが現代工芸となると自己表現としての素材選びから技術、技法まで多種多様になる。審査は一層難しくなるのだ。新素材の開発まで作家が手掛けて出品してくることもある。こうなるとお手上げ状態、作家を呼んで「これは何?」と聞くしかない。

今後増えるであろうこの分野に対して審査員は心して学ぶべきであろう。例えばガラスと革のコラボな作品とか、金属と陶の怪しい関係など思うだけでもゾクゾクする。このように創造力豊かな作品が現れることを期待する。

今回第三室はうまくまとまっていた。可もなく不可もなく、どこかホツとする空間そんな評価のような気がする。逆に個性的な想像力による創造する力が弱いのではないかとさえ思ふのだが、さて。

## 委員コラム

### 「暗いのが見えるよ」 早田美智子

新日美展の会期中、同じ東京都美術館で「ターナー展」が開催されていた。その他にもミケランジェロ展(西洋美術館) 洛中洛外図展(国立博物館) 興福寺の仏頭展(芸大美術館)等々。言うまでもなく上野は芸術のメッカだ。その「上野の美術館」に自分の絵が展示されているというのは考えてみると、凄いいことだと思う。諸先輩のお陰でその「場」が確保されていることに改めて感謝したい。

しばらく前になるが委員会の席上で、中尾会長から「皆さんはなぜ絵を描いているのか」と問われたことがあった。どう答えたものか皆さぐには声が出なかった、と記憶している。なぜ描きたいのか、何を描きたいのか。私の場合で言えば、「この風景を描くことで君は何を表現したいのかね」となるのか。難しい事を聞くものだ。日々の暮らしの中で、何を考え何を憂い何に感動しているか。出来合いの「常識」や「思い込み」ではない、自分なりの表現ができたらどんなに素晴らしいかと思ふ。でも道遥かなりだ。

数年前のことになるが、折に触れ思ひ出す光景がある。私にとつてのひとつの「発見」で、絵を見るときの手助けになってくれていると思うので紹介したい。

地下鉄の車内で隣に乗り合わせた幼い兄弟は五歳と三歳位だった。母親も一緒に私の隣に座つたのだが、電車が発車すると同時に二人がくるんと窓に向かつてお座りした。窓に顔を押しつけている。外の電車でなら分かるが「これは地下鉄である。母親が「何も見えないわよ」と言ったが二人はお構いなし。しばらくして兄が小声で弟にささやくのが聞こえた。「ね、暗いのが見えるでしょ」。三歳がこくと頷いた。一瞬エツと思ひ、体をひねって窓に顔を近づけたが、私の目にはチラチラと照明の残像が見えるだけだった。

言葉を交わしたわけではないが、この時の二人はその後私の中に時々現れている。  
新日美が益々驚きと感動の「場」でありますように。